



カ
ル
メ
ン

秋山晴夫 訳
ブロスベル・メリメ

世界名作全集 12

カ ル メ ン

椿 姫

狭 き 門

肉 体 の 悪 魔

昭和35年7月15日 初版発行

定価 240 円

訳 者 秋 山 晴 夫
鈴 木 力 衛
淀 野 隆 三
江 口 清

発行者 古 田 晁

東京都千代田区神田小川町2-8

株式 筑 摩 書 房
会社

目次

カルメン	三
椿姫	三
狭き門	三五
肉体の悪魔	三六

注
解説

田辺貞之助
四六

ムンダの古戦場*をもつて、バストゥリ・ボエニ地方*、今日のモンダ附近、マルベリーヤの北約二里の地点とする地理学者たちの説には、かねがね私は疑問をもつていた。筆者不詳の古文書『スペイン戦役*』と、またオスーナ公爵*のすぐれた文庫から蒐めたいささかの資料とに基く私自身の推定によれば、カエサルが共和国の選手たちを相手に乾坤一擲*の戦をいどんだこの記念すべき地は、モンテ・リーヤの附近にこそ求めるべきだと考えたわけである。一八三〇年の秋もまだ浅い頃、私はたまたまアングルシヤにあつたのを幸い、まだ未解決のままになつてゐた諸問題を明らかにするため、かなりながい調査旅行を行った。近々発表する予定の拙文*は、善意にあるすべての考古学者たちの疑念を完全に氷解し得るものと期待している。全ヨーロッパの学界に問題となつてゐるこの地理学上の疑問は、いづれ右の論文が解決するであらうが、その前に私はひとつのささやかな物語をお話した

い。もつともこの物語は、ムンダの位置という興味ある問題については、何ら臆測*を下そうとするものではない。

私はコルドバで一人の案内人と二頭の馬を備いいれ、荷物には『カエサルの戦記』一卷とシャツ四五枚だけといういで立ちで出発した。ある日のこと、カチーナ平原中の高地をさまよい歩いて、私はすっかりくたびれてしまつた。喉が渇いて死にそうな思ひである。それに太陽が頭の上からじりじりと照りつけている。カエサルもボムペイウスの息子たちも、いっそ悪魔にやつてしまへという気持だつた。とその時、私の歩いてゐた小道からかなり離れたところに、藺草*や蘆*のまばらに生えた、まっ青な小さい芝地のあるのが、ふと目にはいつた。泉の近いことが察せられたわけだ。近づいてみると、芝地と思つたのは実は沼地で、はたしてカブラ連峰の二つの高い支脈にはさまれた溪谷から発しているらしい一条の小川が、そこに流れこんでいた。その小川をさかのぼつてゆけば、蛭や蛙の少ない、もつと冷たい水があるであらうし、岩の間に小さな日蔭の一つも見つかるかも知れないと、私は結論した。溪谷の入口で私の馬がいなないた。するとどこか見えないところで、もう一頭の馬がすぐそれに応えた。百歩ほど進むと、急に溪谷がひ

らけて、天然の曲馬場とでも言いたい地形が現れた。まわりは高い絶壁で、完全に日がさえぎられている。旅行者には、これ以上の休み場所を見つけないことはまずむずかしかったろう。そそり立った岩の根から、清水がもくもく湧き出していて、雪のようにまっしろい砂を敷きつめた小さな池に落ちこんでいる。水の端には五六本、みごとに檜が青々と立っていた。風に当ることも絶えてなく、清水を吸ってすがすがしい枝葉を揺れていた。それが池のまわりに黒々と影を落している。しかも池のまわりには、つやつやしたこまかい草が、十里四方どこの宿屋に行ってもありつけないようなすばらしい寢床を提供していた。

しかし、こんないい場所を見つけた名誉も、畢竟私のもではなかった。一人の男がもうそこに休んでいて、私がいって行った時は、どうやら眠っていたらしい。馬のいななきに眼をきまして、起き上って馬のそばへ寄って行ったところだった。馬は主人の眠っている間に、附近の草を思うさまごちそうになっていたのだ。男は中背ながら見るからがっしりした若者で、どこか暗い不敵な目つきをしていた。かつては美しかったに違いない皮膚の色は、日にやけて髪の毛よりも黒かった。男は片手に馬の轡をとり、片手に銅身の短銃を握っていた。とっ

さに、私はその短銃と、それを持っている男の獍猛な姿に、いさか胆を冷したことを白状する。しかし盗賊の話はいつも聞かされていても、本物にはさっぱり出会わないところから、私はもう盗賊の存在を信じなくなっていた。それに、市場に出かけるかたぎの百姓さえ、武装に身を固めているのをよく見かけたので、銃をもっているだけで、知らない男の人格を疑うことは、私には許されなかった。——第一、四五枚のシャツとエルゼヴィル版の『戦記』では相手だっとうしろもなからうと、私は思った。そこで私は短銃を持った男に、心安く会釈をした。そして笑顔を作りながら、昼寝のじゃまをしたのではないかとたずねた。彼は、それには答えずに、私の頭から足の先までじろじろと眺めまわした。その結果どうやら納得したと見え、今度はそこへ寄って来た私の案内人を、やはり同じようにじろじろと観察した。見ると案内人はまっ青になって、恐怖の色もあらわに立ちすくんでしまった。私は心中、とんだやつに出会ったぞ！と思った。しかし、不安の色はみせないことだと、すぐ用心した。私は馬から下りて、案内人に轡をはずすように言い、それから泉の端に膝をついて、頭と手を水に浸した。そして、ギデオンの悪しき兵士らのように、腹這いになって存分に水をのんだ。

そのあいだにも、私は案内人と未知の男を絶えず観察した。案内人はしぶしぶ近寄って来た。男の方も我々に對して悪意はもたないらしく、馬の口を放し、初めは水平に構えていた銃もいまは地面に向いていた。

男が私に對してさらに敬意を持合せないらしいことなど、氣にする必要はないと思つたので、私は草の上に横になって、短銃の男に燐石（ろうし）を持たないかとなげなくたずねた。同時に私は煙草入れを出した。未知の男は相変らず無言のまま、ポケットの中をさぐって燐石をとり出すと、すぐ火をつけてくれた。私と向き合つて腰を下したところを見ると、明らかに彼の心は和（なご）いでいた。もつとも銃は相変らず手のうちにあったが、私は葉巻に火をつける、残りのなかから一番上等のやつをとつて、煙草をやるかと彼にきいた。

——やります、と彼は答えた。

これが男の口から聞いた最初の言葉だった。私は彼が、Sをアンダルシヤふう（アンダルシヤふう）に発音（はつおん）しないのに氣がついた。私はそのことから、彼もまた私と同じ旅行者だと推断した。もつとも考古学者ではなさそうだが。

——これなら相当いけましよう、と私はハバナの本物の上等をすすめながら言った。

彼は軽く会釈して、私の葉巻から火を吸いつけ、さて

もう一度頭を下げて謝意を示した。それから彼はさうまそうにふかし始めた。

——ああ、ながいこと契（くわ）わなかった！ 彼は一服目を口と鼻からゆつくりふかしながら声をあげた。

スペインでは葉巻のやりとりは主客の關係をつくることになっている。東方でバンと塩を分け合うのと同じ意味合いである。はたして男は、私の予期以上に口を開くようになった。モンテイーリャ郡の住人だというが、それにしてはこの地方のことに疎過（そと）ぎるように思われた。我々のいるこのすばらしい溪谷の名前も知らなければ、附近の部落の名前一つ言うこともできなかった。そのあげくは、この附近でこわれた城壁や、縁のある大きな瓦、彫刻の施された石などを見たことはないかときくと、そんなものはいっこう氣をつけて見たこともないと答えるしまつ。その代り馬にかけてはなかなかの目ききらしく、私の馬を批評した。もつともこれは、さしてむずかしいことではない。それから彼は、自分の馬の血統を話して聞かせた。コルドバの名のある種馬の血筋を引いているよし、持主の言うところによると疲れを知らな逸物で、ある時など駈足（かあし）と速歩で一日三十里を走り飛ばしたこともあるそうだと。ところが、この話のさいちゅうに、未知の男は突然口をつぐんでしまった。しゃべり

過ぎて、はっと後悔したふうだった。なに、大急ぎでコルドバへひとつ走りするところだったのでね、と彼はちよつとまが惡るやうにいう。公事のことで裁判官の耳に入れておかねばならないことがあったもので……彼はさう言いながら、目を伏せている案内人のアントニオの方を、じろりじろりと見ていた。

私は木蔭と泉に氣をよくしたので、モンテ・リヤの友だちが案内人の背負袋の中に入れてくれた上等のハムが、まだ幾きれが残っていることを思い出した。私はそれをもつて来させ、その知らない男を即席の弁当びらきによんだ。ながいこと煙草を喫っていないとすれば、少くも四十八時間は何も口にしていないだろうと察せられた。はたして彼は餓えた狼のやうに貪り食つた。私と会つたことは、この男にしてみれば天祐だと私は思つた。

ただ、案内人の方はいっこう食べないし、ほとんど飲もうともしない。旅行の初めから無類のおしやべりと見えた彼なのに、口をつぐんだきり一言もしやべらない。どうやら客人がいるので氣づまりらしい。何かの警戒心が二人のそりを合わせないのだが、私にはその原因がはっきり察しかねた。

パンとハムはもう一きれもなくなっていた。私たちは二本目の葉巻をふかした。そこで私は案内人に、馬に轡

をつけるように言い、この新しい友だちに別れを告げようとした。すると彼は、今晚どこにお宿りかと聞いた。案内人の目くばせに氣づく暇もなく、私はからず軒に宿るつもりだと答えた。

——旦那のやうな方が宿るところじゃありませんや。……私もそこへ行くんだが、お供をさせていただけりや、ごいっしょに参りましょうか。

——そいつは有難い。私は馬に乗りながら、そう言つた。

錠を抑えていた案内人は、もう一度目くばせをした。私はいっこう平氣だということを呑みこませるため、肩をそびやかして見せた。さて我々は出発した。

アントニオのしさいあり氣な目くばせ、心配そうな顔つき、二言三言未知の男がもらしたこと、ことに三十里を突つ走つたとか、さらにそのことについて彼のしゃべつたもつともらしからぬ説明などは、道連れの人物について、すでに私の考えを作り上げてしまつていた。私は密輸入者か、おそらくは追剽に相違ない男と道中しているのだと思つた。しかしそれがどうしたというのか。私はスペイン人の氣性をよく知つていたので、いっしょに食べた煙草をふかしたりした男をこわがる必要は毛頭ないと確信していた。それどころか、彼がいてくれ

ば、悪い者に出会う心配もないわけだ。それに山賊とはどんなものか知ることができるのはもっけの幸いだ。山賊に毎日会えるというわけのものではない。危険な人物も、ことにおとなしくて素直だとわかつている時は、いっしょにいるのも一種の魅力があるものだ。

私は、未知の男がおいおい打明け話をするように仕向けてやろうと思った。そこでまず、案内人の目くばせにもかまわず、街道筋の追刺ぎに話をもていった。好意をもて話したことはいうまでもない。その頃アンダルシヤには、ホセ・マリヤという有名な山賊がいて、その活躍ぶりは世間の噂を賑わしていた。「ひょつとしたら、そのホセ・マリヤと道連れになつていいるのではあるまいか？」と私はひそかに思つてみた。……私はこの英雄の話を、もちろん賞めあげ話だが、知つていいる限りして聞かせ、あまつさえその勇氣と義侠心に最大級の敬意を表した。

——ホセ・マリヤかね、くだらないやつですよ、と未知の男はすげなく言つた。

「自分をほんとうにそう思つていいるのだろうか？ それとも大いに謙遜したつもりだろうか？」私は心のなかで問答した。実は道連れの男をよくよく見た結果、ホセ・マリヤの人相書を彼にびつたりと当てはめるのに、つい

に成功したからだ。彼の人相書はアンダルシヤの町々の門に、至るところ貼り出してあるのを見て知つていた。

——まさしく、あの男に違いない。金髪に青い目、大きな口、きれいな歯なみ、小さい手、上等のシャツ、銀ボタンのついたビロードの上衣、白革のゲートル、鹿毛の馬……もう疑う余地はない！ がしかし、彼のおしるびは尊重するとしよう。

我々は宿についた。宿は、彼が先に話したとおり、私がかれまでに出会つた一番みすばらしい宿の一つだつた。広い部屋がたつたひと間あるだけで、台所と食堂と寢室とをかねてゐる。部屋の真中にある平たい石の上で火が燃えていて、煙は屋根にあけた孔から抜けてゆく。

というより、床の上四五尺のところに、雲のようにたなびいていいると言つた方がいい。壁に沿つて、驪馬リッパに使う古ぼけた毛布が五六枚ひろげてあつた。これが旅客の寢床だ。この家、つまりいま述べたようなひと間きりの部屋から、二十歩ばかりのところ、厩うまやになつていいる納屋うけのような建物が立つていた。この風流な家には、少くもその時は、一人の婆さんと十か十一、二の小娘のほか、人影ひとつ見えなかつた。二人とも煤すすけた色をして、おそろしいぼろを着ている。——まさに古代ムンダ・ボエティカイカの住民の生き残りだ！ おおカエサルよ！ おおセ

クストウス・ボンペイウスよ！いま再びこの世に姿を現わさんか、卿等の驚きはいかばかりであろう！私はひそかにそう思った。

私の連れを見ると、婆さんは思わず驚きの声をあげた。

——おや！ドン・ホセの親分じゃないかね！

ドン・ホセは眉の根を寄せ、ものものしく片手を上げて、すぐ婆さんを黙らせてしまった。私は案内人の方をふり向いて、気づかれないように合図をした。一夜の合宿をする男については、いっさい口出し無用の意味を通わせたわけだ。夕飯は予期していたよりは上等だった。料理は一尺ほどの高さがある小さなテーブルにのせて出された。じじどりの肉を米といっしょに煮こんで唐辛子をきかせたのが一皿、それから油漬けの唐辛子、最後がガスバーチョで、これは唐辛子入りのサラダといったところ。こんな具合に三皿とも薬味のきいた料理なので、我々はしきりとモンテリヤの葡萄酒がはいった革袋に助けを求めた。しかもこの葡萄酒がまたなかなかの逸品だった。食事のあとで、私は壁にマンドリンが下っているのを見つけて、——スペインでは至るところにこのマンドリンがある——給仕をしてくれた小娘に弾けるかと訊いてみた。

——だめです。でもドン・ホセはとても上手ですよ、という小娘の答えだった。

今度は彼に、

——何かうたってくれませんか、お国の音楽が大好きなもので。

するとドン・ホセは上機嫌に叫んだ。

——あんなうまい葉巻をいただいたお方からの注文じゃ、断るわけにもゆきませんや。

それから、彼はマンドリンを持って来させて、かつ弾きかつ歌った。荒削りの声ながら感じがあつた。哀調をおびた、奇妙な節まわし。文句は一言も解し得なかった。

——いまのはどうやらスペインの唄じゃありませんね。地方で聞いたことのあるソルシーコにそっくりだ。文句はバスク語でしよう、おそらく。

——そうです、とドン・ホセは陰気に答えた。

彼はマンドリンを床の上に置いて腕組みをしたまま、消えかかっている火を見つめる。品のいい、しかも凄味のある顔が、小さなテーブルの上のランプを浴びたところは、ミルトンの悪魔を思わせた。私の道連れもまた、見捨てて来た住み家や、誤って自ら招いた追放の身と思案しているのだろうか。私はもう一度話を陽気に戻そう

とした。しかし彼は何か悲しいことでも考えこんでいるのか、返事もしない。婆さんは部屋やまの隅の紐ひもに穴のあいた毛布を張り渡したうしろへ引込んで、もう寝ていた。小娘も婆さんの後から、その婦人用の隠れ場所にはいつてしまった。すると案内人が座を立てて、厩うまやまでいっしょに来るように私を促した。それを耳にすると、ドン・ホセははっと夢から醒めたように、案内人にどこへ行くのかとあらあらしい口調で聞いた。

——厩へ、と案内人は答えた。

——何しに？ 馬にやかいばもどつさりあるぜ。ここ
で寝な。旦那もご承知だろうから。

——なに、旦那の馬が病氣じゃないかと思うのさ。ち
よつと見ていただきたいんだ。手当の法を知っておいで
かと思つてね。

アントニオが、何か折入つて私に話したいことのある
のは察せられた。しかしそうかといつて、ドン・ホセに
疑惑を抱かせるのはどうかと思つたし、それにこの際と
るべき最善の手は、できるだけ彼に信頼を示すことだと
思われた。そこで私はアントニオに、馬のことはいっこ
うわからないし、それにもう寝たいからと答えた。ド
ン・ホセは案内人について厩に行き、まもなく一人で戻
つて来た。彼の言うには、馬は別状ないが、案内人がば

かに大切がつて、汗をかかせようと、自分の上衣で一生
懸命こすつてやっている、どうやらこのいい仕事に夜明
かしするつもりらしい、ということだった。しかし私は
もう騾馬の毛布の上に横になつていた。そして毛布に触
れないように、ていねいに自分の外套にくるまつてい
た。ドン・ホセも、そばに寝させていただきますと断つ
て、戸口に横になつた。短銃の雷管を新しいのと取りか
えて、枕がわりの背負袋の下に置いておくことだけは忘
れない。お休みの挨拶を交して五分もすると、私たちは
もう深い眠りにおちていた。

だいぶ疲れていたので、こんな宿でもぐつすり眠れる
つもりだったが、一時間もするとはなはだ不愉快なむず
痒かゆさに、たちまち私は目を醒さめた。そのむず痒さがいか
なる性質のものであるかを理解すると、さつそく私は飛
び起きてしまった。こんな居心地の悪い屋根の下より
は、いつそ露天で夜明かししたほうがましだと思つたわ
けである。私は爪先立ちで戸口まで行つた。そして真人
間の眠りをむさばっているドン・ホセの寢床をまたい
で、どうやら眼を醒さませずに外に出た。戸口のわきに広
い木の腰掛が置いてあつた。私はその上に横になつて、
夜を明すため、最善の準備をした。もう一度眼をつむろ
うとすると、ふと私の前を人の影と馬の影が、音もなく、

通り過ぎたような気がした。私は腰掛の上に起き上り、アントニオだなどと思った。いまじぶん彼が廐の外にいるのを爰に思つて立ち上った。そして、やつて来る鼻先へ歩いて行つた。彼の方で先に私に気がついて立ち止つた。

——やつはどこです？ アントニオは小声で聞いた。

——うちの中。眠っている。南京虫が苦にならないらしい。馬なんかつれ出してどうするのかね。

その時気がついたことだが、納屋から引出す際音を立てないように、アントニオは馬の脚に古毛布の切れ端をていねいにまきつけていた。

——どうかもっと小さい声で願いますよ！ 旦那は、

あいつが何者かご存じないんでしょう？ ホセ・ナヴァーロですぜ、アンダルシヤ随一の悪党ですよ。一日中旦那に合図してたんだが、さっぱり通じねえのだから。

——悪党だろうとなかろうと、私にや何のかかわりもないことだ。盗まれたわけじゃなし、第一大丈夫盗む気なんかないさ。

——そうなら何よりできあ。だがね旦那、やつを引渡した者にや二百デユカですぜ。ここから一里半ほど先に槍騎兵の屯所があるから、夜の明けないうちに腕っ節のいいところを四五人連れて来ますよ。やつの馬でひとつ

走りしてえところだが、小意地の悪い畜生で、ナヴァーロでなけりやとても近寄れたもんでねえ。

——馬鹿なことを！ 密告するって、いったいあの男がお前に何の悪いことをしたのかね。第一お前がいうほど悪党かどうかさ。それはたしかかね。

——確かになんにも。さっきも厩へついて来て、「てめえはどうやらおれを知っているな。あのいい旦那におれの素姓をいつてみる、てめえの脳天はふつ飛ぶぞ、いいか」こうぬかしましたぜ。旦那はどうかやつのはにいて下さいよ。旦那は何も心配することはねえ。旦那がそばにいると思えば、やつは疑いも起しませんからね。

話しているうちに、私たちは宿からかなり遠くまで来ていたので、もう蹄鉄の音も聞かれる心配はなかった。アントニオはまたたくまに馬の脚をくるんだぼろをとりのけた。彼は鞍にまたがる身がまえをした。私はなんとか引きとめようと、嚇したりすかしたりしてみた。

——私は貧乏人ですよ、旦那。二百デユカですぜ、捨てちゃいられませんや。第一、あの悪党をこの土地から片づけてしまふわけできあ。だが気をつけて下さいよ。ナヴァーロが眼を醒したら、たちまち鉄砲にとびつきまですぜ。危ねえ、危ねえ！ でも私あいまさら後へはひか

れねえ。旦那は旦那で、いいようにしておくんなさい。
彼は早くも鞍にまたがっていた。両足で拍車をくれた。
私はたちまち闇のなかにその影を見失ってしまった。

私は案内人にしたたか腹をたてたが、しかし気がかりも気がかりだった。しばらく思索したあとで決心して宿へ引き返した。ドン・ホセはまだ眠っていた。連日の冒険による疲労と寝不足を、いま一挙に取り戻していることはもちろんだった。私はやむを得ず、彼を手あらに揺りおこした。その時の彼のすさまじい目つきと、いきなり短銃に飛びついた動作とは、永久に私の脳裡を離れないだろう。用心のため、私は短銃を彼の寢床から少しはなれたところにずらしておいたのだ。

私は彼に言った。

——せっかくのところを起してすみませんが、ちょっとつまらないことをお聞きしたいので。どうでしょう、ここへ槍騎兵が六人ばかりやって来ても、しさいありませんか？

彼は躍りあがった。そして恐ろしい声で

——だれが言ったのです？ と聞いた。

——だれから聞いたっていいでしょう。お役にさえ立たば。

——旦那の案内人だ！ 裏切ったな、今に見ていろ！
やつはどこにいます？

——さあどこだか……既だろう、おおかた。……ともあれ耳にはいったので……

——だれからです。……まさか婆さんじゃあるまいし……

——知らない男さ。……もうとやかく言わずに返事をしたまえ、君は兵隊が来るのを待っていられないわけがあるのかね？ ないのかね？ もしわけがあるんなら、ぐずぐずしない方がいい。ないんなら、お休みなさいを言いますよ。眠りのおじやまをしたお詫びをします。

——旦那の案内人だな、違いねえ。始めっから臭えと思っていたんだ。……なに……いまに見ていろ！……じや旦那、失礼します。えらいごやかになりました。神様のお報いがありますように。私あこれで、旦那の思っておいでなさるほどの悪党じゃねえですよ、……とんでもねえ。私にはまだ物のわかった方の同情がいただけることも、少しはあるつもりです。……じゃ失礼します。……たった一つの心残りは、旦那にご恩返しのできないことです。

——ドン・ホセ、お役に立ったんなら、礼心にどうか約束して下さるまいか。だれにも疑いをかけないこと、

復讐しようなどと思わないこと。さあ、この葉巻を持って行きたまえ。道中でやるといい。ではご機嫌よう！

私は彼の方に手をさしのべた。

彼は返事もしないで、私の手を握った。ついで短銃と背負袋をとり上げ、それから私にはわからない方言で、二言三言婆さんに何か言い残すと、納屋のほうへ飛び出して行った。しばらくすると、彼が野面を馬をとばしてゆく音が聞えた。

私は、もう一度腰掛の上に横になってみたが、もう眠れなかった。私はひとり、問答を重ねた。追剣ぎを、いやいやおそらく人殺しだろう、そんな人間を絞首台から救ってやったことはたして正しいことだったろうか？ しかもただハムを分け合い、ヴァレンシアふうの米料理をいっしょに食ったというだけの理由で。法律を支持した案内人を、おれは裏切ったのじゃないだろうか。彼を極悪人の復讐の危険にさらしたようなものじゃないだろうか？ しかしともあれ、これも同宿のよしみだ、……いやいや野蛮人の偏見だ、私はそう自分に言った。これから先、あの悪党の犯す罪は、みんなおれの責任だ。……それにしても、どんな理窟にだって屈しないこの良心の衝動が、はたして偏見というものだろうか？ こんな面倒な立場に立った以上、後悔なしにはどうてい切り抜ける

ことはむずかしからう。私が自分の行動の是非についてなおも迷い続けていると、そこへアントニオといっしょに、六人ほどの騎兵が姿を現した。もっともアントニオは用心深くしんがりについて来ている。私は彼らの前に出て行った。そして、悪党はもう二時間以上も前に逃げてしまったことを知らせた。婆さんは伍長に訊問されて、ナヴァーロは知っているが、たった一人ぼっちの暮しであってみれば、密告などして命を捨てる気にはなれなかったと答えた。それから、彼がここへ来た時は、いつも夜中に立つきまりだとも言った。私はおかげで四五里もある所へ出向いて、旅券を見せたり、裁判官の前で、調書に署名をしたりしなければならなかった。それがすんで、やっと私はまた考古学の調査に取りかかることを許された。アントニオにしてみれば、二百デユカをつかみ損ねたのはてつきり私のじゃまだでたと見て、大いに含むところがあつた。それでも私たちはともかくもコルドバで仲よく別れた。私はそこで、懐中の許す限り心附けをふんばつした。

.....

二

私は数日をコルドバで過した。実はドミニック派の坊さんたちの文庫にさる写本のあることを聞いていたからで、それを見せてもらえば、往時のムンダに関する面白い資料が見つかるはずだった。私は親切な神父たちの手厚い歓迎を受けて、昼はもっぱらかれらの僧院に暮し、町へは夕方からぶらつきに出た。コルドバは日没の頃になると、グワダルキビール河の右岸にあたる河岸の上に、ひま人がいっぱい出ている。昔製革業で名声をとどろかした土地がら、この河岸に來ると、今でもその名残りである鞣皮工場の臭氣をかがされるが、そのかわりまた、おおいに見ごたえのある光景も楽しむことができる。お告げの鐘が鳴る四五分前になると、かなり高い河岸の下の水ぎわに、女たちがたくさん集って来る。そのなかへは、男は絶対に立入らない。お告げが鳴り渡ると同時に、夜になったものと見なされる。最後の鐘が鳴り終ると、女はいっせいに着物を脱ぎ捨てて、水にはいる。そこで叫ぶ、笑うのかまびすしい騒ぎが始まる。河岸の上には男がむらがつて、水浴びをする女たちの見物

に目を見張って余念がない。もっともたいしたものが見えるわけではないが、河の濃藍色の水面にほの白く浮ぶおぼろの人影は、詩的精神を高揚させずにおかないから、いささかの想像力さえあれば、アクテオンの運命を恐れることなく、ディアナとニンフたちの水浴のさまを想像することも決して困難ではない。——こんな話を聞いた。数人のならず者がある日金を出し合って寺院の鐘撞男に握らせ、定刻の二十分前にお告げの鐘をつかせた。まだ明かかったがグワダルキビール河のニンフたちは躊躇しなかった。太陽よりもお告げの鐘の方を信用して、さっそく水浴びの支度にかかった。身支度といっても、いつも簡単しごくである。もつとも私はその場に居合わせたわけではない。私の行ったころの鐘撞男は頑固者だったし、しかも日射しはすでに消えうせて、猫でもなければコルドバ一の別嬪女工と、一番年をとったオレンジ売りの婆さんの区別さえつきかねた。

ある夕方のこと、物のけじめもつかない時刻のことだった。河岸の手摺にもたれて煙草をふかしていると、一人の女が水ぎわに通じる階段を上って来て、私のそばに腰をかけた。女は髪にジャスミンの大きな花束を挿していた。夕方になるとうっとりするような匂いを放つ花だ。女は質素な身なりだった。むしろ貧しい身なりとい

うべきかも知れない。黒ずくめで、夕方の女工たちはたいていみなこれだ。しかるべき婦人なら黒は朝のうちだけで、夕方はフランスふうの着物をきる。わが水あがりの女は、私のそばへ寄りながら、頭を包んでいた布をさりと肩へすべらせた。星より落つる薄明りに、私は女が小作りのまだ若い、どうしてあか抜けした姿をしているのと、目がきわだつて大きいのに気づいた。私はすぐさま葉巻をすてた。彼女は、この純フランス流の礼儀に基く私の心づかいがわかると、すぐ、煙草の匂いは大好きだ。辛い紙巻が手にはいれば、自分でも喫うと言った。さいわいあつらえ向きの紙巻が煙草入れにあつたので、さっそく私は差し出した。女はこころよく一本とつて、子供が持つて寄つて来た火縄の先から、一銭やつて火をつけた。水あがりの美しい女と私が、煙草の煙をまじえながらながとおしゃべりしているうちに、河岸にはもう私たちのほかほとんど人影も見えなくなつてしまった。そこで、もうあながち失礼でもあるまいと考え、私は女をネヴエリヤの氷菓子にさそつた。彼女はちよつと慎しやかなためらいを見せておいて承知した。しかし決める前に時間を聞いたので、私は時計を鳴らした。時計の鳴るのがだいぶ珍しらしく、

——なんて發明をなさるんでしょう、外国の方は！

お国はどちらですの？　きつとイギリスでしょう？

——どういたしまして、フランス人です。じゃお嬢さん、いやそれとも奥さんですか、あなたはコルドバの方でしょう？　たぶん。

——いいえ。

——ではきつとアンダルシヤだ。やわらかな言葉つきでわかるような気がしますよ。

——そんなにはうぼうの言葉つきがおわかりでしたら、私の生れぐらいきつとわかるはずですわ。

——ではきつと天国にじき近い、キリストの国の方でしよう。

(アンダルシヤのことをこう呼ぶことは、友人の高名な闘牛士フランススコ・セヴィーリヤから聞いていた)

——驚きますわ、天国だなんて。……ここの人たちは、天国は私たちには縁のないところだと申しますわ。

——じゃモールの方かな。それとも……私は言いかけて口をつぐんだ。まさかユダヤ人とは言えなかった。

——いやですよ、ちゃんとご承知のくせに、私がボヘミアの女だぐらい。ひとつ占いをしてあげましょうか？　カルメンシータのことはお聞きになったでしょう？　私のことですね。

当時、十五年前の私は全くの無信仰者だったので、相